其方面ノ缺點ガ續々トシテ造花ノ上ニ顯ハレテ居ルガ通常造花ヲ見ル人々ハ其色采ノ絢爛ナル姿ニ眩マサレテ此意外ナル缺點ニ氣ガ附カヌノデアルガ植物學者ガ造花ヲ見ルト此等ノ缺點ガ直グ目ザワリニナル乃チ之ヲ改良シテ良造花トスルコトハ何ンデモナク宜シク然ルベキ植物專門家ニ交渉スルコト丶又一方デハ造花者自身ニ能ク植物學ヲ勉強スルコト丶デアッテ此二ツノ事ガ行ハレテ此ニ始メテ其目的ガ達セラルル

以上述べ來ッタ樣ナ理由デ私ハ大ニ植物趣味ヲ我國人ノ間ニ鼓吹シタイト思フ世人ノ中デ此事ハ世ノ為メニ大ニ善イコトダト思ハルル御方ハ何卒協力シテ下サイ尚此ノ外ニ此方面ノコトデ言ッテ見タイコトガ多々アレドモ誌面ニ限リガアルカラ復追テ述ベルコトニシテ今回ハ玆ニ筆ヲ擱イタ(畢)

○大根ハ蓋シ原ト海濱ノ植物ナラン并ニ其和漢名ノ語原

牧野富太郎

大根(だいこん)即チ萊菔(蘿蔔ハ俗名ダト云フ)ハ Raphanus sativus L. デアル本品ハ一般ニ世人ノ知悉スル如ク今普ク圃中ニ栽培セラレ海ヲ距ル遠キ山間ノ僻地デモ亦通常之ヲ見受クレドモ然シ私ハ大根ハ原ト海濱ノ一植物(然シ日本ノ原産デハナイ)デアッタデアロウト思フ其レ故其圃中ニ作ッテアル大根ノ種子ガ何時トナシニ逸出スレバ之レガ海濱砂場デハ天然生ノ樣ニ能ク生エルガ然シ普通ノ土地デハ其樣ナコトハナク獨(タダ)海濱ノミニ限ラレルノデアル其海濱砂場ニ生エシ者ハ能ク成長繁茂シテ花ヲ開キ實ヲ結ビ又其種子ヨリ自然ニ發芽成長シテ年々歳々之ヲ繰リ返シツツ野生ノ大根ト成リ了ルノデ是ガ所謂濱(はま)だいこんデアル此はまだいこんハ陽春ニ花サキ孟夏ニ角ヲ結ビテ後チ枯槁シ仲秋ニ種子萠發シテ更ニ新苗ヲ生ジ以テ三冬ヲ凌グ此ノ如ク一榮一枯一盛一衰ノ間多クノ年所ヲ閲(フ)ルモノデアルカラ其植物ハ漸ヲ追テ全然野生植物ノ狀態ニ復ヘリ根ハ質堅ク形チ瘦削シテ厚肥脆甘

ノ態ヲ失ヒ莖葉ニハ粗毛ガ多クナリ且葉質ガ硬クナリ花ハ紫色ガ濃クナリ果實即チ角ハ瘠セテ括(クビ)レガ著シクナッテ居ル、ソコデ考ノ周到ナラザル人ハタヾ此括レノ強クナッタコトヽ其野生ノ狀態トノミヲ瞥見シ輕卒ニモ之ヲ歐洲產ノ Wild Radish 一名 White Charlock 一名 Jointed Charlock 即チ Raphanus Raphanistrum L.（一名 Raphanistrum Lampsana GAERTN.）ト同物デアルト思ヒ居レドモ是レハ斷ジテ謬リノ見デアッテ我はまだいこんハ決シテ其品デハナイノデアル家植ノ大根ガ荒廢地ニ生エテ天然的ニ生長シタ時ニハ果實ハ剛クナッテ括レガ著シクナルコト恰モ R. Raphanistrum L. ノ果實ノ樣ニナルコトガアル事實ハ西洋ノ學者デモ既ニソウ言ッテ居ル又我日本ノ地デハ何處ヘ行ッテモ此 R. Raphanistrum L. ニハ逢着スルコトガナイ此 R. Raphanistrum L. ノ果實ハ其括レガ著シイモンデアルカラ之ヲ我はまだいこんノ果實ト見比ブレバ多少能クハ相似テ居レドモ然シ R. Raphanistrum L. ノ花色ハ極メテ稀ニ淡紫色ヲ呈スルコトガアレドモ大抵ハ黃色カ淡白色カデアッテ六七月ノ頃ニ開キ我はまだいこんノ花ノ悉ク皆紫色或ハ淡紫色デ四五月ノ候ニ開クト一樣デハナイ又はまだいこんハ必ズ二年生ノ品（新苗ハ自然ニ秋生ヘル）デ且必ズ海濱ニ限ラレテ生ジテ居ルモノデアルガ彼ノ R. Raphanistrum L. ハ圃地（往々害草トナル）、路傍若クハ廢地ニ生ジ偶ニ二年生本ノ姿ヲナセドモ大抵ハ一年生ノ植物デアル、ソコデ此はまだいこんノ種子ヲ採リテ特

洋種野だいこん（縮圖）

(Thomé)

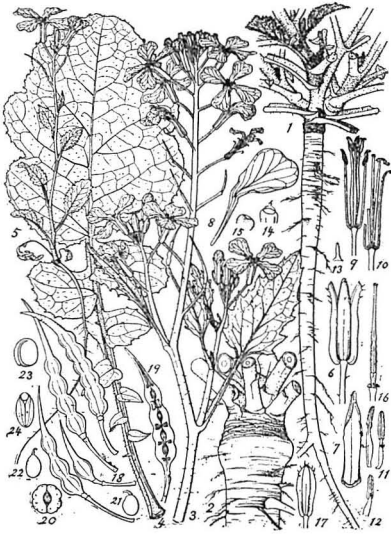
Raphanus Raphanistrum L.

(1)ハ萼ノ一對ト花瓣トヲ除去セル花 (2)花瓣ノ一 (3)雌蕊 (4)果實 (5)果實ノ縱截 (6)果實ノ橫截 (7)種子

ニ之ヲ圃中ニ播キ何年モ何年モ之ヲ繰リ返セバ復タ漸々家植ノ大根ニ復歸スル是レハ陸前ノ仙臺ナル宮城縣師範學校ノ坂庭清一郎君ノ行レタ實驗ニ徴シテモ略ボ明カナ事實デアル（其實驗記事ハ「理學界」ニ出テ居ル終リノ方ニ其全文ガ轉載シテアル）此樣ニ家植ノ大根ガ外ノ場處デハソンナコトハナイガ唯海濱砂場ノミニ行ケバ怡ンデ自由ニ萠出シ年々自ラ榮エ自ラ播種シ敢テ盡クルノ期ナキ所ヲ以テ考フレバ大根ノ原種ハ蓋シ一ノ海濱植物デアッタコトガ追想シ得ラル、又大根ガ原ト海濱植物デアッタト云フコトニ裏書キスル今一ツノ證據ガ別ニアル其レハ何デアルカト言フト是レハ其果實デアル大根ノ果實ハ其果皮ガ著シキ厚キ栓質ニナッテ居ッテ且其輕キコト宛モ魚ヲ釣ルトキノ泛子(ウケ)ノ樣ナノデ此果實ガ海水ニ漂フテ遠近ニ運バレルモノデアルコトガ想像セラルル此ノ樣ナ構造故輕ク海水ニ浮ビテ沈ムコトガナク波ニ隨フテ其處此處ノ濱ニ打揚ゲラレ適當ナル場處ニ落附ケバ此ニ時ヲ得テ發芽スルコトトナル若シ此レガ海邊ニアラザル陸地ノ植物デアルトスレバ果皮薄クテ熟時開裂シ直チニ其附近ニ種子ヲ滲スルヲ利トスベク即チ當ニあぶらな、はたざほ、たねつけばな等ノ樣ナ趣トナッテ居テヨイ譯デアルガ此大根ノ果實ハ幾時カ海水ニ浮ンデ漂流セネバナラヌモノ故假令其レガ水ニ入ルモ容易ニ水ガ其内部ヘ滲透セヌ用意ヲナシテ居ル即チ其果實ガアノ樣ニ厚ク輕クナッテ居リ且熟スルモ直チニ開裂セヌ樣ニナッテ居ル乃チ現在ノ狀態ヲ呈セル其果實カラ考ヘテ其源ニ遡レバ大根ノ故郷ハ蓋シ海濱デアッタコトガ充分想像セラルルノデアル

はまぢんちゃう（Myoporum bontioides A. GRAY.）ト稱スル海邊生ノ一灌木ガアッテ九州ノ薩摩肥前ナドニ産スル其果實ハ核果デアルガ然シ其外果皮中果皮ハ頗ル厚キ栓質トナッテ輕イ爲メニ其果實ハ波ノ淺ヘ去ルニ任セテ波上ニ浮泛シ再ビ打チ揚ゲラレテ始メテ其處ニ芽ヲ出スノデアル其幾時カ水中ニ在ルノ間其外部ガ上述ノ樣ニ栓質デアルカラ決シテ水ガ其内部ヘ浸透シナイデ能ク浮クノデアル今此はまぢんちゃうノ果實ノ狀態ヲ以テ推シテモ大根ノ果實ガ海濱植物性デアルコトヲ聯想スルコトガ出來ルむらさき科ノすなびきさう（Tournefortia

sibirica L.)ノ果實、きく科ノはまぐるま(Wedelia prostrata HEMSL.)ノ果實、繖形科ノはまばうふう一名八百屋(やほや)ばうふう(Phellopterus littoralis BENTH.)ノ果實又ハしゅろ科ノ椰子樹(Cocos nucifera L.)ノ果實モ大小コソ違フガ是レ亦はまぢんちゃうノ果實ト略ボ同様ノ構ヘヲ具ヘ共ニ海水ニ浮ンデ遠近ニ漂着スル用意ヲナシテ居ル又こうぼふむぎ一名ふでくさ(Carex macrocephala WILLD.)幷ニこうぼふしば Carex pumila THUNB.)ノ果實ハ其薄キ果皮ニ代ッテ果壺ガ著シク厚サヲ增シ容易ニ海水ガ浸ミ込メナイ様ニ堅固ニ内部ノ果實ヲ保護シテ居ル海岸植物ノ果實ニハ必用上此ンナ装置ヲシタ者ガ多イ

はまだいこん一名のだいこん（縮圖）

Raphanus sativus L. var. raphanistroides Makino.

はまだいこんハ我邦諸州ノ海濱砂場ニ普通デアッテ春時美麗ナル紫花ヲ開キ海邊諸處ヲ裝飾シテ居ル又南ハ琉球ノ諸島ニモ生ズル、私ハ先年之ヲ研究シテ前ニ述ベタ様ニ之ヲ家植ノ大根カラ出タ一品デアルト斷定シ乃チ Raphanus sativus L. forma raphanistroides MAKINO. ナル學名ヲ發表シテ置イタ即チ植物學雜誌第十三卷第七十頁ノ歐文欄ニ出テ居ル、日本ノ植物ヲ書タミケル氏ヤフランシェ氏ヤ支那ノ植物ヲ書タヘムズレー氏ナドガシーボルト氏ガ九州ノなき島デ採タ品サバチエ氏ガ相州横須賀デ採タ品幷ニカーペンター氏ガ琉球デ採タ品ヲ Raphanus Raphanistrum L. (=Raphanistrum innocuum MEDIC.) ト檢定シテ居ルケレドモ此等ハ皆我はまだいこんヲ其品ト誤認シタモノデアル

現時デハ西洋ノ大根モ東洋ノ大根モ共ニ純然タル天然生ノ者ハ何處ヘ行ッテモ見附カラナイ其レ故其故國幷ニ

原種ニ就テ學者間ニ種々議論ガアッテ其見解ガ一致シテ居ナイ或ル人ハ西洋ノ大根ハ Raphanus Raphanistrum L. ガ原種デアロウト言ッテ居ルケレドモ或ル人ハ之ヲ否定シテ居ル又或ル人ハ支那幷ニ日本ノ東洋大根ハ西洋大根トハ其原ガ異フト言ッテ居ル畢竟此兩者ハ別種デアルトマデ極言シテ居ル又其生地ニ就テモ西洋大根ノ故郷ハ歐洲幷ニ西部亞細亞デアロウシ東洋大根ノ故郷ハ蓋シ支那日本方面デアロウト言ッテ居ルガ然シ共ニ舊世界溫帶地ノ原產デアルコトハ爭ハレヌ事實デアル支那方面ハドウカ知ラヌガ我日本ハ決シテ大根ノ本國ノ一デハナイ日本ノ大根ハ昔多分支那ヨリ渡セシモノデ今日野生ノ姿トナッテ海濱ニ生ジテ居ルモノハ上ニ記セシ通リ畢竟家植ノ大根ノ種子ガ散溢(コボ)レ出デテ出來タモノデ此海濱生ノ品即チ此はまだいこんガ原トデ此カラ家植ノ大根ガ出來タノデハナイ

支那ニ在テハ往々大根ガ野生シテ居ルト書イテアルモノガアルガ然シ是レハ純然タル古昔ヨリノ野生カドウカ頗ル疑ハシイ私ノ考デハ同國ニ栽培シテ居ル大根ハ蓋シ太古時代ニ遠ク西方ノ異域ヨリ傳ヘタ者デアロウト想フ今ハ一般ニ盛ンニ作ッテ居ルコトハ支那ノ書ニ「今天下通有之」ト記シテアルデモ分ル支那デ大根ノ一番舊キ上古ノ名ハ蘆葩 (lu fi) デアッテ中古ニ轉ジテ萊菔 (lai fuh) トナリ後世ニ至テ訛テ蘿蔔 (lo peh) トナッタト云フ此蘆葩ハ或ハはぼたんノ *ραφανος* (rhaphanos) だいこんノ *ραφανις* (rhaphanis) ト同系字ナルかぶノ *ραπυς* (rhapus) 或ハ *ραφυς* (rhaphus)〔此數名ハ文字ガ互ニ串珠シテ居ル〕ノ音譯デハナカロウカト思フガコンナ字學ノ事ニハ固ヨリ暗イ私デアルカラ其邊ノ思案ガ充分ニ附カヌガ若シ萬一ニモ右ノ考ヘ通リデアルトスレバ支那ノ大根ハ太古ニ此ンナ名稱ヲ伴フテ遠キ西域即チ東部歐洲邊ヨリ西部亞細亞ヲ通シテ遂ニ支那ニ入リ來ッタモノデアルト推測スルコトガ出來ルノデアル

大根ハ舊キ名ノ於朋泥(又、於保爾、淤富泥、意富泥トモ書ク)即チおほねヲ漢字デ書イタモノデ固ヨリ漢名デハナイガ今日デハ皆一般ニ之ヲ音讀シテだいこんト呼ンデ居ル世間デハ往々コレヲだいこト略稱スル古歌デハ

之ヲかゞみぐさ（歌ニ曰フ、さき草の中にもはやきかゝみ草、やかてかつみとうなへつるかな）ト讀ンダモノデアルガ春ノ七草デハ殊更ニ之ヲすゞしろト呼バネバナラナイ

今此ニ參考ノ爲メ上述「理學界」（大正四年四月發行第十二巻第十號）ニ出テ居ル坂庭清一郎君ノ「ハマダイコンの人爲淘汰に就ての研究」ト題スル全文章ヲ同雜誌ヨリ左ニ轉載ショウ

『予（坂庭清一郎）はハマダイコンに就きて栽培研究せんとせしこと數年にして其機を得ざりしが明治四十四年八月千葉縣に遊び犬吠ケ岬、犬若ケ岬間の海岸砂地に於てハマダイコンの多く野生せるを見其移植陶冶を試むべく同年種を得てより以來今日まで研究を繼續せしが意外の好成績を得たればその概略を記して以て參考に供せんと欲す

一、ハマダイコンの研究　1 葉及莖　濃綠色にて葉肉厚く共に毛なく二十日大根に似莖は多くの枝を出す　2 花　濃紫色のもの多く稀に白色のもの又は淡紫色のもの等を見る而して年中花の絕ゆることとなし　3 種子及種子の散布　莢の形狀は小にして一粒每に切れ散布には至極便利にして風に飛ばされ自然に砂に被覆せられ適當の水分を得る時は發芽するものなり　4 根　形は紡錘狀圓錐狀球形等種々あれども何れにも多くの支根を出し其質は殆んど木質にして食すること能はず然かも辛味もなく將た味も宜しからず前の如く根は數條に分裂し其の根の直徑は五六分位とす而して其一部切斷せられ砂地の馬の足跡等に入る時はそれより新に發芽し漸次發育するものあり

二、栽培の經過　A 第一回　明治四十四年九月十三日彼の地より採りし種子を我が農場に播き其生長を研究せしに發芽力甚だ旺盛にして發育も亦良好なり病蟲害に冒されず完全に勢よく發達せり　同年十一月大根を採取して其形狀を見しに種々の形態あり支根も野生のよりは稍々少なく特に現はれし性質は長みを帶びし事なり試みに食せしも野生のものと毫も變る所なし而して葉も硬く殆んど食川に供せられず　B 第二回　同四十五年七月種子を下す今回は間引をなし其後成長を待ちて根を調査するに支根は前より少く其中には二十日大根の如き早生のもの宮重の如き形狀のものありたり　同年九月殊に大なるものを拔きて見るに既に收穫期に達したるものあり之を煮て味ふに前回のよりは柔かなる氣味あり　十月、十一月の期に採取するに熟期に達したるものと達せざるものとあり其長形のものは最も遲くして圓形のものは熟期に達することの早きを知り得たり　上の中最も模範的のものと思しき母本を丁寧に移植せり　C 第三回　大正二年七月前年の如く播種せしに葉の形一般に大きくなりしを認めたり而して葉の大なるものは他の大根に比して成長殊に速かにして又前年の如く間引をせしに以前よりも殊に形よく支根も亦少くなれるを目擊せり九、十、十一月に至り熟期に達せしものを檢するに一般に根大形之を煮て味ふに纖維柔らかく更に甘味を帶ぶ煮ゆることも普通大根よりは早く稍々食用に適する傾向を備へたり然れども普通のものゝ如く辛味なく皮の部と肉の部と判然たり　D 第四回　大正三年形體よき母本

より採取せる種子を七月に播き一層其陶冶に心を致せり其の結果今回は二十日大根の如きもの出でゝ地上に抜け出でたるを見る十月頃一部を採取すれば聖護院蕪に類似せるものを得たり　之を鹽漬となせしに普通大根と蕪との中間の味ありき　十一月に採取せるものゝ如きは宮重大根位の形にて直徑二三寸程ありたりしかも猶普通大根の味を有せず　以上第四回の淘汰研究を了へしが其の結果より推せば爾後回を重ぬるに從ひ確かに普通大根と異る所なきものを得ん本年も亦形よきものを種子として母本を作り置きたれば繼續して淘汰の結果を確めんとす』

○谷間ノ姫百合ト云フ和名ノ植物ナシ

牧野富太郎

歐洲ニモ北米ニモ產スルガ又我日本ニモ生ズルきみかげさう(君影草)一名すゞらん(鈴蘭、らん科ニモ同名ノ植物ガアル)即チ Convallaria majalis L. ヲ能ク世間デハ谷間ノ姫百合ト呼稱シテ居ルガ元來ソンナ和名即チ日本名ハ此植物ニハ無イノデアル其レ故「之ヲ谷間ノ姫百合ト云フ」ナドト書イテアル文章ヲ見ルト如何ニモ其人ノ學識ガ淺薄デアルコトガ看取サルル然シドウ言フ機會カラ谷間の姫百合ト云フ様ナ名ガ出來タカト云フト是レハ此植物ヲ西洋デハ俗ニ Lily-of-the-Valley ト稱スルカラデアル今之ヲ邦語ニ譯スレバ「谷の百合」デアルガ此「谷の百合」ヲ美辭的ニシタモノガ「谷間の姫百合」デアッテ始テ此「谷間の姫百合」ナル名ヲ拵ヘ明治二十一年二月カラ同二十三年九月ノ間ニ四冊(完結)出版サレタ西洋小說(原書ハ BERTHA M. CLAY 氏ノ Dora thorne デアル)ノ表題トナシテ出シタ人ハ靑萍逸人ノ末松謙澄博士ト孤松二宮熊二郎氏トデアッタガ二宮氏ノ名ハタダ其第一卷ニ署名ガアルバカリデアル單ニ書物ノ表題バカリデナク文中ニモ『殊に谷間の姫百合などは何となく愛らしくて人ずきのする花ではありませぬか』(第一卷第百三頁)ノ句ガアル此「谷間の姫百合」ナル小說ハ當時頗ル評判デアッテ皇后陛下ニモ獻上シテ乙夜ノ覽ニ供ヘ且大分讀書界ヲ賑ハシタモノダ其レカラ後農學士川上瀧彌農學士森廣兩氏著ノ「はな」(後ニ「花」ト改メテアル)ト題スル可ナリ世人ニ歡迎サレタ書物(明